



# マコトちゃん まことちゃん と

## ◇豪放な泣きぶり爆発

みんな遊戯室へはいつて、サークルがはじまったのに、マコトちゃんがひとり、玄関の下駄箱のところで、思

いきり大きな声を出して泣いている。その泣声の間から「かえる！かえる！」というどなりつけるような激烈なことばがほとばしり出る。

この「豪放な泣きぶり」は、マコトちゃんの持前だ。それが爆発したら、先生たちは手のつけようがない。それが、今、おこったのである。

それで、園長先生がやってきた。

先生は、いきなりマコトちゃんをひっかかえた。泣きながら、どなりながら、まさにはきものを取りだして、表へとびだそうとする急な場合だったからである。ことばでとめたたり、肩をおさえたり、手をひっぱったりするくらいではとめられない非常事態だったからである。

そうして、うんと抱きしめて、強い調子でいった。

「かえるんじゃない、かえっちゃ、だめ」非常事態をとめるのには、普通のやさしさでは間にあわない。多少の非常手段を必要とすると思っただからである。

ところが、マコトちゃんの声と呼びは一層爆発した。からだをもがいて、両足は空を蹴った。

これではならぬ。非常手段は益々非常事態を昂じさせるだけだ。それほど、マコトちゃんは興奮しているのである。

それでは手を離した。

土間の簧の子の上へ立ったマコトちゃんは、ブルドックのように「うわんうわん」と吼えながら、両足の脛をこすりあわせて、からだをふるわせる。

先生はちよつとの間、そのままにして、むきあつて立った。おたがいによこし息を入れるためである。この際「息を入れる」のは、疲労をいやすためではない。興奮をやわらげて、気分転換の素地をつくるためである。

やがて、先生は手を出して、マコトちゃん

んの頭をなぜながら、しずかにいった。

「いい子だ、いい子だ、泣きやめるね」

そうして、さっきの「ひっかかえる」のとはちがって、やんわりとだいた。だくとそここの段へ腰をおろした。長くだいてるのは重くもあるし、立っているよりは腰をおろしたほうが、おちついた感じになるからである。

「いい子だ、いい子だ、マコトちゃん、園長先生のいうこと、よくきくね」

もちろん、へんじはいらない。これは話しかけというよりも、むしろ暗示だからだ。それ以上一言もいわない。だまって、胸や、肩や、脊中を、やわらかになぜはじめた。これは、興奮を消して、おちつきを戻し、更には安定感を生みださせるためである。

次第に、マコトちゃんのからだのうごきはしずまり、泣声はすすり泣きに変っていた。そうして、じっと胸に頭を寄せているマコトちゃんを見ると、先生は両方の鼓動がいっしょに会うように思われた。何とはなしに「かわいい」という感じが、よりかかられている先生の胸の中に湧いてきた。

#### ◇寸は寸を尺は尺を取る

「水をたくさん飲んできて、水鉄砲であそびましょう一、二、三、四しゅうしゅうしゅう」

うたう声が、遊戯室がらきこえてくる。

マコトちゃんのすすり泣きは、もうさっきやまった。目はあらぬほうを見つめて、からだはじっとしている。それは、歌の聲が耳にはいつてきたことを示すものだ。

そこで、先生はひとことばだけいった。「遊戯室で、何をやっているのかな」

これももちろん答を予期しての質問ではない。マコトちゃんの注意を、遊戯室のほうへ転じる誘導の一手段にほかならない。

マコトちゃんだまっていたが、相変らずじっとしているのは、その方にひきつけられはじめた証拠だ。そろそろその方へ近ずいても、もう反撥しないだろう。

そこで、遊戯室へ通ずる廊下へ、そうつと出ようとしてふりむくと、入口の戸があげている。廊下へ出れば、それがまっすぐに見える。表まではっきり見える。表を見たら、せっかく外から内へ転じた注意と興

味が俄然もとへかえって、「かえる、かえる」と、もがきださないと限らぬ。否、

まだ全然内に興味が集まったというのでなく、外への関心と絶縁していないとすれば、この危険は多分にある。それには、入口の戸をしめねばならぬ。といって、だいたのをそこへおいて、先生が立っていったのは、今までの安定感がくずれてしまう。といって、だいたのまま立っていつてしめては、表を見せにゆくような、逆な結果になつてしまふだろう。といって、ほかの先生を呼んでしめてもらったのでは、マコトちゃんの注意をその方へ誘うことになつて、表への関心をふたたびよびだすことになるだろう。

先生はしばらく機会を待った。と——ひよっと、ひとりの先生がこつちをむいた。透かさず、そつと片手を挙げて手招きして、戸口をさして、手をふって「しめる」相図をした。心得た先生はしずかにいつてしずかにしめた。すべては無言のうち——マコトちゃんが気がつかないうちになされた。

そこで、園長先生はすくなくともマコト

ちゃんに新しい刺戟にならない程度に、だいたまま中腰になって、そりそりと、廊下へにじり出た。そうして、何げなく遊戯室の方へむいて、壁によりかかってすわった。

中では、歌や、遊戯や、お話などが、順に行われていった。それに連れて、マコトちゃんの興味も、その方に向いてゆくことが、それと認められた。

「寸は寸を占め、尺は尺を取る」ということばがあるが、まさにその通り、マコトちゃんの様子と見合わせつつ、一寸出られれば必ず一寸を、一尺出られれば必ず一尺を——というように、次第々々に前へ出た。そうしてとうとう、遊戯室の隅へはいってしまった。

相図をみると、さっきの先生は、そうつと遊戯室の戸をしめた。それでとにかくマコトちゃんは「遊戯室の世界の中の人」になったのである。

#### ◆よい機会があふない

ところで「マコトちゃんが園長先生にだかれてる」ということは、ほかの園児たち

に取って、驚異でもあり、好奇の的でもある。かわるがわるふりむいて、その方を見る。

もう興奮がさめて、一応平静になったマコトちゃんは、見られると、てれっくさくになって、先生の膝の上で小さくなった。それがひどくなると、まださっきの大泣きの後味がまったく消え去っていないので、ひよっと誘われて、しくしくはじめないとも限らない。そうなたら逆転である。

先生は、ふりむく子どもにむかって、無言で手をふり、目をくばって制止した。「こちちを見てはいけない」などと、ことばを出すと、かえってほかの子どもを刺戟して、いよいよこちちをむかせることにもなり、またマコトちゃんの耳にひびいて「見られている」という意識を強めて、いよいよちみちあがらせることにもなるからである。

やがて、マコトちゃんの組の子どもたちが、ピアノに連れて、床の上に大きく円く描かれた赤線の上を、ぐるぐるまわってあるきだした。

見ると、マコトちゃんはじっとその方に

目をそそいでいる。

よい機会！先生はだいたまま立ちあがると、列の中へはいろうとした。そうしてマコトちゃんを離して、お友だちといっしょにあるくようにして、もとにかえらせようというつもりだった。

ところが、マコトちゃんはふんぞりかえって、両手で先生にかじりつくと共に、両足をばたばたさせた。

時期尚早！先生はすぐひっかえして、また、今までの隅へすわって、今までのようにじっとだいた。

#### ◆額と額をこつんさせる

おひるの時間になった。

みんなじぶんのお弁当をもって、めいめいの部屋へはいる。

マコトちゃんは先生の胸から頭をはなして、顔をあげて、その方を見た。興味がひかれるという以上に、たぶん「おなかの要求」を、新しく感じだしたのだろう。

ここがまた機会！そう思った先生は、いっしょにお弁当を取って、いっしょに部屋へはいっていいこうとしたが、そうすれば、

益々お友だちの注視を浴びることになって一層でれっくさが加わり、先生と離れにくくなるおそれがある。

「もっと自然に仲間へはいる方法はないだろうか」

考えると、ふと、或る思いが浮かんだので、いった。

「マコトちゃん、組の中で、誰が好き？」

「まことちゃん」

「ああ、まことちゃんか」

成程、同じ組に、もうひとり「まことちゃん」がいた。

「マコトちゃんだから、まことちゃんが好きなんだね」

そういうと、にっこりした。

「ちょっと、まことちゃんを呼んでちょうだい」

大きな声で、先生を呼んでいった。

もう声を出していてもだいじょうぶな程度に、マコトちゃんの気持が回復したことがわかったからである。

まことちゃんは、何事かと、ふしぎそうな顔をしてやってきた。

「まことちゃんね、マコトちゃんがまこと

ちゃん好きなんだって。だから、マコトちゃんのお弁当、もってきてやってね」

そうすると、まことちゃんはにっこりした。むしろ誇らしげにお弁当をもってきた。

「どうもありがとう」

先生は、マコトちゃんのかわりにお礼をいって、お弁当を受取って、渡して、はじめて手を離して立たせると、そのまま立った。

それで、ふたりはむきあった。

「マコトちゃんとまことちゃんとおなじだねえ」

そういって、ふたりの頭へ手をやって、

額と額を軽くこつんとさせると、両方とも笑いだした。

「だから、マコトちゃんとまことちゃんはすきで、仲よしだね」

ふたりともこっくりする。

「だから、いっしょに、お弁当たべるね」

ふたりともこっくりする。

「じゃあ、まことちゃんとマコトちゃんとお手々つないで」

先生がちょっと手を添えると、ふたりは手を取りあった。

「そうそう、そうしていっしょにお部屋へ

いくね」

ちょっと、マコトちゃんの額に影がさしたようなので、先生はお弁当をもった片手を取って、まことちゃんと両方から、マコトちゃんをまん中にしてあるきだした。

部屋には、みんなお弁当を前にして腰かけていた。

先生はすばやくふたりをならんてかけさせて、すぐ、みんなで「食前の歌」をうたわせる。いうまでもなく、ほかにそれる寸隙も与えないで、お弁当の雰囲気の中に、マコトちゃんを引入れてしまうためである。

はじめはちょっと手足をぎくぎくさせたようだったが、うたっているうちにやまった。

うたいおわると、受持の先生が「めしあがれ」みんなが「いただきます」かくて、マコトちゃんはまったくもとのマコトちゃんにかえたのである。

× × ×

× × ×